

## 1. はじめに

奥会津地方の文化を形成していった「基盤」とは何でしょうか？ 長い間受け継がれてきた様々な事象の「始原」はどこまでさかのぼることができるのでしょうか？ それを探る旅に出かけてみたいと思います。

今、柳津町では会津地方を代表する縄文時代中期の大集落、石生前遺跡の整理作業が「やないづ縄文館 土器とくらしのミュージアム」で行われています。火焰型土器を含む大量の土器や石器が出土した1987年の発掘調査から35年が過ぎ、考古学や関連諸科学の進展、新資料の発見などを受けて、民具展示を含めたりリニューアルに向けて作業が進められているところです。私はその整理を担当しています。整理作業によって石生前遺跡の今までの研究成果に加え、町内の池ノ尻遺跡からは「人体把手付土器」が発見されて大きく報道されるなど新知見も増えてきました。

連載の始めとなる今回は、プロローグとして7回にわたり奥会津を含めた会津地方の縄文時代を概観してみたいと思います。

### 縄文時代とは・・・

縄文時代は日本史における時代区分のひとつで、研究者によって諸説あるものの、旧石器時代の後、今から約16000年前に始まり、約3000～2400年前まで続いた時代です。何をもち縄文時代の開始とするのか、また終わりはいつか・・・言い換えれば弥生時代の始まりをどこに求めるのかという点でも研究者の意見は分かれています。一般的に縄文時代は土器の発明、弓矢・磨製石器の使用、狩猟・漁労・採集中心の生活、定住の始まりなどが特徴としてあげられています。

旧石器時代の終わり頃、地球規模の温暖化によって植生が変化し、森の恵みなど定住生活に必要な環境が人々の周りに出現して、縄文の人々は徐々に集落（ムラ）を作って定住していきました。また信仰に関わる様々な行為が行われたのも、この時代です。

### 縄文時代の遺跡の立地

南北35km、東西13kmの広さをもつ会津盆地では大河川である阿賀川が南北に、盆地中央には日橋川が西に流れ、さらに盆地縁辺部から多くの河川が流れ込むなどしています。過去の文献記録や地質学的な知見によれば、会津盆地内では白髭洪水や次郎水洪水などの大洪水・氾濫が繰り返し起こったことがわかっています。

盆地中央部に位置し、標高が低い会津若松市中央部・湯川村などに縄文時代の遺跡は少なく、むしろ盆地周縁部の丘陵・山間部などに分布は集中しています。会津盆地の低い地域（ここでは標高200m以下を指す）でも近年、縄文時代の遺構・遺物が発見されつつあります。数は少ないものの、今後、縄文期の低地利用の観点から注意すべき事実です。

会津盆地の周縁部を越えた只見川や阿賀川の本流域、只見川に注ぐ伊南川・館岩川等々の河川沿い、また阿賀川上流域や、その支流沿いの段丘上や丘陵などには、数多くの縄文時代の遺跡が分布しています。山がちで沖積部が少ないという地理的制約が奥会津地域の遺跡の分布に大きく影響しています。

特に縄文時代の遺跡が集中しているのは、会津盆地の南西縁の山麓、盆地北東の雄国山麓の斜面や丘陵です。会津の考古学研究の先駆者、二瓶清は著作『会津における石器時代』（1936年）の中で、会津盆地の縄文遺跡の分布は盆地内部の平野部にはほとんど無く、盆地周縁の緩斜面か扇状地で日当たりが良く、近くに良質の水源がある場所に多いと的確に述べています。奥会津の遺跡については、1950年刊行の『福島県の古代文化』で著者の梅宮茂が「山間奥地にある遺跡—奥会津の燧ヶ岳の麓にも先史遺跡がある—」という見出しをつけて概説しており、巻末には計59遺跡が集成されています。